

ジャマイカにおける養護教育支援　―報告―

金戸　裕美

(15-1, ジャマイカ, 養護, 富山県立となみ養護学校)

1 私の夢

祖母が視覚に障害を持っていたことから、障害児・者にかかわる仕事につきたいと思っていた高校時代。障害児教育を学ぶ中で、教師になろうと決意した大学時代。そして、教師になってますます夢がふくらんだ初任1年目。海外での生活を夢見て、3年間の養護学校での経験をもとに青年海外協力隊に応募し、合格通知を手にする事ができた2002年の夏。それから1年後、3ヶ月の訓練を終えて、不安と期待を胸に、ジャマイカに飛び立った。

2 ジャマイカの国について

ジャマイカは人口262万人、面積は秋田県くらいのカリブ海に浮かぶ小さな島である。カリブ海周辺の国がスペイン語圏である中、1962年までイギリスに占領されていたことにより、公用語が唯一英語の国である。また、「Broken English」(壊れた英語)と言われるパトワ語を現地語として使用している。例として英語「Later」(レイター)をパトワ語では(リエター)、「Come here」(カム ヒアー)を(コミヤ)と読んだりする。ジャマイカを代表する「No problem」(問題ないよ)という言葉は、暑い島国でのんびり暮らすジャマイカ人の楽観主義を象徴する。この楽観主義に困ったこともあったけれど、活動を振り返ってみると助けられたことのほうが多かったように思う。しかし、どんなに時間に遅れても「No problem」(問題ないよ)と言えるジャマイカ人には活動の最後まで驚かされた。もしジャマイカ人に時間通りに来てほしい場合には、大げさかもしれないが3時間前の時間を集合時刻として伝えることが望ましいだろう。

3 ジャマイカの養護教育

私が配属された「ジャマイカ知的障害児協会(JAMR)」は「スクール・オブ・ホープ」という特殊教育機関を運営している。これはジャマイカで最も古い特殊教育機関(1956年設立)であり、規模も最大である。また、ろう学校(JAD)が各地方に設置されており、ジャマイカ最東端のポートアントニオでは、知的障害の養護学校と聾学校が併設されている。

4 隊員としての活動

(1) 任地での活動(スクール・オブ・ホープ ポートアントニオ校)

私は、このポートアントニオ校で重度重複障害児童生徒の作業学習や自閉症児童生徒の個

別学習を担当、さらに情操教育を充実させるために「図画工作」を全児童生徒に指導してきた。

①言葉の壁を乗り越えるために

英語が苦手な私にとって、子どもたちが話すパトワ語はほとんど理解できなかった。教科に「英語」があるため、パトワ語は教育において使用しないことが原則であったが、教師自らが指導する上でパトワ語を使用し、子どもたちもその方が馴染みやすいため、学校で（いやジャマイカで、といっても過言ではない）「英語」を耳にすることはほとんどなかった。そんな中、言葉の通じない私が展開した授業方法は、図画工作を始め、あらゆる面で見本を見せながら「Like this」（このように）という方法であった。聴覚障害児には、英単語やパトワ語と同時に手話（アメリカ手話とジャマイカ手話が合わさったもの）を獲得し、指導していた。どちらかといえば、私にとって手話のほうが獲得しやすかった。言葉が分からなくても身振り手振りが言葉の意味を教えてくれたからである。自閉症の子どもたちにとって言葉が通じない中で手がかりになるものが視覚刺激であることを、自分が海外生活の中で体験していたように思う。

言葉の壁を乗り越えるために努力したことは、分からないことは曖昧にしないこと、伝えたいことは間違えてもいいからとことん話すこと、この2つの信念を持って臨んだことが私のジャマイカでの生活を大きく支えてくれた。

②養護隊員として重点をおいて支援したこと

まず、養護隊員として私が重点をおいたことは、子どもが興味関心のあるもの、子どもができること、子どもから能力を引き出せるものを教材として使用したことである。また、ボランティアとして重点をおいたことは、私が去ったあとも現地の教員が継続していけるもの、モノがない中で、現地のモノを利用していくことであった。特に、モノがない中での教材の研究は大変ではあったが、やりがいも大きかった。日本から資金を援助してもらい購入する、または送ってもらう、この支援方法はお金で解決するため簡単ではあるが、継続はできない。私が去ったあとも継続して指導していくためには、現地教員や児童生徒が容易に手に入れる廃材を使うことが一番重要なことだった。

③モノがない中での教材の工夫

作業学習や図画工作の指導では、古い雑誌を使った三角クラフト（写真1・2）や新聞紙を使ったアンデルセン、古い紙をちぎって漉して作るリサイクルペーパー（写真3）やはりこ（写真4）など数々の作品を児童生徒とともに作ってきた。活動の終盤には、地域の人や保護者に児童生徒の様子や作品を見てもらうために作品展示・販売会（写真5・6）を行った。日本円にして約8000円の売り上げがあり、その後の教材購入の資金にとっても役立った。児童生徒にとって作品が売れた、ということは次に作品を作る意欲にもつながっていった。



写真1 三角クラフト



写真2 三角クラフトで作ったバスケット



写真3 リサイクルペーパー



写真4 はりこ



写真5 作品展示会



写真6 作品販売会

④図画工作プロジェクト

活動が始まったころから3つの大きなプロジェクトを考えていた。1つ目は子どもたちが経験したことのない共同宿泊学習を2泊3日で企画し、狭い教室では体験できない図画工作の指導をしたこと（写真7・8）。2つ目は作品展示・販売会、3つ目は看板もない、さみし

い場所に設置されている学校をなんとか地域の人々の目につく場所にしたいという私と同僚の希望で、学校の前に設置されていたバス停に壁画を描いたこと（写真9）だった。この3つのプロジェクトは今後も継続できるようにほぼ全ての資金を地域から寄付を募って集めたこと、同僚と共に企画を進めたこともあり、大成功に終わった。次から次にやりたいことは出てきたが、短い任期の中で展開した活動に悔いはない。



写真7 2泊3日の共同宿泊学習
巨大なペイント



写真8 2泊3日の共同宿泊学習
オリジナルTシャツづくり



写真9 バス停に壁画（人物画）

（2）現地教員向けのワークショップ

任地での活動と並行して、現地教員に向けて資質の向上や技術提供をするためのワークショップを行ってきた。このワークショップは赴任して言葉もままならない2003年9月からすぐに始まった。この活動の目的は、任地校だけではなく、ジャマイカ全土に技術を広げていきたいということだった。

①ジャマイカと日本の養護教育の比較

教育的アプローチ方法の違いとして、ジャマイカは暗記・模倣的な教授法を取り入れている。さらに、国語と算数に重点を置き、情操教育の受ける機会が少ないこと、日本に比べて教員のアイデアや教材が不足していることが特徴としてあげられた。

②「図画工作」の模擬授業

私がジャマイカに赴任して養護隊員が4人そろった。そこで、チーム・テーチングの指導形態をとって図画工作中心の模擬授業を各任地で展開していった（写真10）。各任地をまわることによって、それぞれの学校の特徴が見られ、自分の学校を振り返ることができた。また、各隊員と共同して授業をすることにより幅広くアイデアを得ることができた。徐々にワークショップの活動形態が定まり、首都に拠点を置いてワークショップ（写真11）を進めていくことになった。首都でのワークショップは模擬授業、講義、図画工作の実演をまじえて展開し、参加者も徐々に増えていった。



写真10 各任地でのワークショップ



写真11 首都でのワークショップ

③ 公式「自閉症児者のためのワークショップ」

図画工作中心のワークショップが JAMR（知的障害児協会）から認められ、赴任して1年経ったころには、JAMRから要望された「自閉症児者」に限定した公式のワークショップを開催することになっていた。ボランティアとして常に考えることは、隊員が去ったあとも継続されていくことである。ワークショップも継続されるように、確実に技術や内容が伝わるように工夫していった。参加者を自閉症児者10名、その保護者10名、その自閉症児者に関わる教育者（スーパーバイザー、担任）10名にしぼった。そして参加者は5回継続してワークショップに参加することとした。内容としては、4回までは教材などを提示しながら私たちが模擬授業を展開した。そして、「自閉症」という障害の特性を理解し、個別の指導計画を作成して確実な実態把握を繰り返し、構造化・視覚化を利用した授業内容の構成、教材の工夫について講義を重ねた。最後の1回のワークショップでは、模擬授業や講義を踏まえた上で、現地教員による研究授業をしてもらった。ここから分かるように、受身的なワークショップから実践・参加型の積極的な、質の高いワークショップになっていった。最後に、JAMR が評価し、参加者（スーパーバイザー・担任）10名のうち、6名が認定証を授与された（写真12）。授与された6名が今後のワークショップを引き継ぐ代表となった。このようにして、ワークショップが私たち隊員の手から現地教員に引き継ぐ形を取ることができた。



写真 1 2 認定証授与

（３）今後のジャマイカ養護教育支援

ワークショップ終盤から現地の教員をはじめとする教育関係者や保護者に対して意識調査を実施した。そこで課題としてあがってきたことは、設備や教材の不足、教育課程の見直しの必要性、教育関係者との連携が不十分、重度重複障害者への支援が不十分という４点であった。そこで、今後派遣される後任隊員がどのような方向でジャマイカの養護教育に支援していくべきかを明確にするため、JICA（国際協力機構事業団）、JAMRやジャマイカの教育省も交えてPDM（プロジェクト・デザイン・マトリックス）を作成した。そして以下の４点について方向性が定められた。

- ① 継続したワークショップの開催を通して、教材のアイディア提供、環境や設備の構造化を図ること
- ② 障害の特性を把握した教育課程について、見直し、検討すること。
- ③ 隊員や中心となる現地の教育関係者がチームを組んで地方に出向いて「ワークショップ」を開催すること。
- ④ 首都に養護教育の専門家を派遣し、常にJAMRや教育省と連携し、さらに重度重複障害児者への支援に取り組んでいくこと。

５ 活動のまとめ

これまでに、成功した活動や自己満足した活動について述べてきたが、成功に導くまでには数々の困難があったこと、その解決に努力したこと、そして、まだ残っている問題点があることを忘れてはいけない。

最後に、私がジャマイカに行ってみて感じたこと、それは、訓練期間を含め、２年間活動できたことは自分ひとりの力ではない、ということである。家族をはじめ、応援してくれた日本の同僚や友達、そして隊員の仲間や温かく迎えてくれた現地の同僚の支えがあったからこそ活動を無事終了し、日本に帰国することができたと実感している。どんな場所においても決して自分ひとりでは生きられない、常に守られ、支えられて生きていることを２年間通し

て学ぶことができた。また、日本とジャマイカ、話す言葉や住む生活環境、文化が違って同じ人であることに変わりはない。私が2年間一緒に学んできたジャマイカの子どもたちはこれからも私の大事な児童生徒（写真13）であることに変わりはない。ジャマイカは私にとって第2の故郷である。この2年間の中で会えたさまざまな人の輪を大切にしながら、これからもいろんなことに挑戦していきたい。「夢は必ず叶うもの」そう信じて、新たな夢を持って生きていこうと思う。さらに、自分の経験を多くの人に伝え、日本に還元していきたい。海外に出向いて支援することだけが国際協力ではなく、次は、日本でできる国際協力に努めたいと思う。今まで応援し、支えてくれた仲間に感謝し、2年間の活動のまとめとしたい。



写真13 ジャマイカの児童生徒と同僚とのお別れ会

ジャマイカ任地での活動

スクールオブホープ ポートアントニオ校

知的障害養護学校 (28名) ろう学校 (7名)



作業学習1

(重度重複障害児童・生徒の指導)

はりこ～新聞紙を利用して～



作業学習2

(重度重複障害児童・生徒の指導)

リサイクルペーパー～使い古した紙を利用して～



作業学習3

(重度重複障害児童・生徒の指導)

三角クラフト～雑誌を利用して～



個別指導1

(自閉症児童・生徒の指導)

マッチング～教室環境を構造化した中で～



個別指導2

(自閉症児童・生徒の指導)

絵画指導～興味関心のある活動を生かして～



個別指導3

(自閉症児童・生徒の指導)

編み物・三角クラフト ～単純作業の繰り返しを利用して～



図画工作の指導1

チーム・ティーチング



図画工作の指導2

共同宿泊学習 (2泊3日)

～巨大人物画とオリジナルTシャツ作り～



図画工作の指導3

～バス停に壁画 (人物画) ～



作品展示・販売会

作業学習や個別指導、図画工作の指導を通して作った作品



教師・保護者向けのワークショップ

～学校と家庭の連携づくり～



スペシャル・オリンピック



異文化交流会

～ジャマイカと日本の文化～



現地教員向けのワークショップ



ジャマイカ養護教育の問題点

- 教育的アプローチの問題
(教授法による教育方法—暗記、模倣)
- 教育を受ける機会の減少
(国語と数学への重点化、情操教育の削減)
- 教師のアイデア不足、教材の不足
(単調な活動の繰り返し)

ワークショップの目的

- (1) 児童生徒主体の授業を展開することで、児童生徒が生き生きと活動する様子が見られるようになり、意欲的に活動できるようにする。
- (2) 教員が障害についての理解を深め、より適切な指導を行うことができるようにする。
- (3) 教員に対してモデル授業を展開することにより、効果的な教材教具の活用法等の習得、教員の指導力向上を図る。

ワークショップの内容

- 1 チーム・ティーチングによる模擬授業
(図画工作を中心とした情操教育の授業)
- 2 日本の教育システムの紹介、教材の紹介
- 3 図画工作のアイデア提供 (体験)

(対象) 隊員の任地で勤務する教師
首都に勤務する教師 (10名程度)
(回数) 隊員の任地校 (4回) 首都 (3回)

「図画工作」模擬授業1 マンデビル校 (新聞紙遊び)



「図画工作」模擬授業2 スパニッシュタウン校 (折染め)



「図画工作」模擬授業3
ポートマリア校 (パラシュート)



「図画工作」模擬授業4
ポートアントニオ校 (はりこ)



「図画工作」模擬授業5～7
首都 キングストン校 (三角クラフト)



ワークショップの結果

- JAMRとの連携が深まった。
 - 日本の教育方法 (チーム・ティーチング) が取り入れられた。
 - 養護教育の課題が明確になった。
- ① 教員の児童生徒の障害に対する理解をより促すこと。
 - ② 児童生徒の実態に応じた支援を展開し、教材教具を効果的に活用すること。
 - ③ 児童生徒の実態に応じた教育課程を編成すること。

公式「自閉症児者のためのワークショップ

(対象)

自閉症児童生徒 (10名) 保護者 (10名)
担任、地方と首都校のスーパーバイザー (10名)

(内容)

5回の段階を踏んだ、継続的なワークショップ

- 1 模擬授業
- 2 「自閉症」に関する講義 (障害特性、実態把握、指導方法、個別の指導計画の作成、教材の工夫など)
- 3 研究授業 (最終回) — 現地の教員が4回のワークショップを踏まえて、最後に授業を展開する。
- 4 評価、認定証授与

自閉症児者のためのワークショップ
パート1 (2004. 10. 7)
小麦粉粘土と形遊び



自閉症児者のためのワークショップ
パート2 (2004. 11. 4)
色のマッチングと形合わせ



自閉症児者のためのワークショップ
パート3 (2004. 12. 9)
ステンシルとクリスマスツリー作り



自閉症児者のためのワークショップ
パート4 (2005. 1. 13)
体の部位を知ろう (マッチングと着せ替え)



自閉症児者のためのワークショップ
最終回 (2005. 2. 17)
現地教員による研究授業



認定証授与式



自閉症児者のためのワークショップ
結果と反省

- 障害の特性を把握することができたため、教育課程の見直しの必要性が出てきた。
- 受身的な「ワークショップ」から実践・参加型の積極的な、質の高い「ワークショップ」の開催に努めるようになった。(児童生徒の実態に応じた教材づくり、指導内容や方法の検討、個別の指導計画の活用)

重度重複障害児・者施設における ワークショップ



ジャマイカの養護教育に対する意識調査の実施 (養護教育関係者・保護者対象)

- 1 設備や教材の不足
- 2 教育課程の見直しの必要性
- 3 教育関係者との連携が不十分
- 4 重度重複障害児者への支援が不十分

「プロジェクト デザイン マトリックス (PDM)」の作成 (添付資料)
(Project Design Matrix about Special education in Jamaica)

今後の支援の方針を隊員で検討し、JAMR、そして国際協力機構事業団(JICA)の再検討のもとPDMを作成した。

今後のジャマイカ養護教育への支援

- 1 継続したワークショップの開催を通して、教材のアイデア提供、環境や設備の構造化を図ること。
- 2 障害の特性を把握した教育課程について、見直し、検討すること。
- 3 隊員や中心となるジャマイカの教育関係者がチームを組んで地方に出向いて「ワークショップ」を開催すること。
- 4 首都に養護教育の専門家を派遣し、常にJAMRや教育省と連携し、さらに重度重複障害児者への支援にも取り組んでいくこと。

協力隊に参加して・・・



- ・日本から海外に出てみて感じたこと
- ・日本とジャマイカの養護学校を比較して考えたこと
- ・これから、どんな活動を日本で取り組んでいきたいか？

ありがとうございました！





「ジャマイカにおける養護教育支援」

1 ジャマイカの国について

○独立年	1962年 英国から独立（カリブ海英領植民地で最初） 現在も英連邦加盟	○主要産業	鉱業（ボーキサイト）、農業（コーヒー、砂糖、バナナ）、観光業、工業（アパレル、食品加工）
○面積	11,424 平方キロ	○GNI	7,738 百万米ドル（2004）（世銀）
○人口	262 万人	○一人当たり GNI	2,900 米ドル（2004）（世銀）
○人種	アフリカ系 91%、黒人系混血 7%（91 年国勢調査）	○経済成長率	2.3%（2003）
○言語	英語、パトウア	○物価上昇率	14.1%（2003）
○政体	立憲君主制	○失業率	13.1%（2003）
○元首	英国女王エリザベス 2 世（総督はジャマイカ人）	○主要貿易品目	
○議会	二院制（上院 21 名、下院 60 名）	輸出	アルミナ、ボーキサイト、砂糖、衣類
○政府	議員内閣制、行政の長は首相 閣僚のうち 2 乃至 4 名は上院議員、その他は下院議員 現首相：パーシヴァル・J・パターソン 現外相：キース・ナイト	輸入	原材料、消費財、資本財
<対日関係近況>		○主要貿易相手国	米国、カナダ、オランダ、英国、ノルウェー
		○通貨	ジャマイカドル 1 米ドル＝63.875 ジャマイカドル（2005 年 11 月現在）

- （1） ジャマイカは英語圏カリブ地域の中心国であり、92 年に在京大が設置され、95 年に我が方が実館化、96 年に駐神戸名誉領事館が開設されたことにより関係が益々緊密化。97 年、秋篠宮同妃両殿下が皇族として初めてカリブを御訪問された。98 年 10 月にはパターソン首相が公式実務訪問賓客として訪日する等要人往来も活発。2000 年 11 月、東京で初めての日・カリブ閣僚レベル会議が開催され、ロバートソン外相が出席した。2001 年 1 月には平沼経済産業大臣がジャマイカを訪問した。
- （2） ハネムーンを中心に日本人観光客が急増（89 年の約 3 千人→96 年の 2 万人強）したが、現在は減少傾向。
- （3） ジャマイカ音楽のレゲエも日本で根強い人気。
- （4） ジャマイカでしか産出しない世界最高級のブルー・マウンテン・コーヒーを我が国が約 8 割輸入。
- （5） 経済協力については、有償資金協力及び無償資金協力を主とした援助を実施している他、文化無償協力及び草の根無償協力も実施。技術協力については保健・医療、行政等の分野で研修員を受入れており、89 年より青年海外協力隊の派遣も行っている。

2 ジャマイカにおける養護教育

養護隊員が配属された「ジャマイカ知的障害児協会（JAMR＝Jamaica Association for Persons with Mental Retardation）」は「スクール・オブ・ホープ（School of Hope）」という特殊教育機関を運営している。これはジャマイカで最も古い特殊教育機関（1956 年設立）であり、規模も最大である。知的障害児の養護学校を設置、基礎学習や職業訓練を行っている。養護隊員の活動先はすべて「スクール・オブ・ホープ」が運営する養護学校である。また、ろう学校（JAD＝Jamaica Association for the Deaf）が各地方に設置されており、ジャマイカ最東端のポートアントニオでは、知的障害の養護学校と聾学校が併設されている。

3 ジャマイカ任地での活動 ―スクールオブホープポートアントニオ校―（P.2～4）

4 現地教員向けの「ワークショップ」（P.4～7）添付資料（PDM P.8）

5 まとめ

※子どもの作品集やその他、詳しいジャマイカでの活動内容を HP に掲載してあります。時間があればぜひ立ち寄ってみてください。また、何か質問などありましたら、HP の掲示板やメールを通してご連絡ください。お待ちしております。 http://www.geocities.jp/hi_rok0320/index.html